

井上円了と西洋思想

——円了における西洋哲学——

福 鎌 忠 恕

緒 論

円了が諸学の根源に「哲学」を置いたことは有名であるが、彼の創設した「哲学館」——のちの東洋大学——そのものさえ、円了の生涯における思想的、社会的活躍の見地から考察すれば、円了という巨人の一事業にすぎなかったごとく、彼の「哲学」も時代と作品に依じて、その意味内容が必ずしも一定していない。「哲学」という表現は、今日においてさえ極めて多義多様に用いられているが、周知のごとく、明治初期にはまだ術語として定着していなかった。むしろ、円了その他のいわゆる「明治啓蒙思想家」の努力により、このジャルゴン——術語——が次第に一般化したのであり、その限りにおいて、「哲学館」を創設し、のちに「哲学」の東洋大学として「政治」の早稲田大学、「経済」の慶応大学と並んで三大私学の「学祖」とされた円了の功績は大きい。

では円了における「哲学」とは何か。最も広い意味に取れば円了にとって哲学とは、人間が人間として、しかも

人間社会——家族、地域社会、国家、世界、宇宙に至るまでの社会集団——の中で真の人間として、つまり、儒教的に表現すれば五倫を守り、仁の精神で十全に生きるための道であったと思われる。仏門に生を享け、仏教人として立つべく教育されながら、明治維新の大動乱と、それに次ぐ廢仏毀釈の風潮の中で最高学府で学んだ円了が、学生時代にヘーゲルやカント、またコントヤスベンサーを早くも研究したことは、周知であるが、しかし、その円了が荀子を卒業論文に選んだことは、従来ほとんど取上げられていないが、極めて暗示的である。孟子の性善説に対して性悪説をもって知られる荀子は、ホップズ流の性悪説ではなく、人間がその生まれ込んだ人間集団の内在于いる自然の原理——人倫——を外れたことを行う傾向を持つという意味で人間は性悪なのであり、逆に言えば社会を良くすれば人間は善人たらざるをえない、と主張している。その基本的原理こそ、当時一世を風靡したキリスト教——特にアメリカ流清教徒的個人主義——と、その盾の反面である自由主義、また、個人の自覚のみを説いて昭和の最近に至るまで日本思想界を不毛たらしめているイデオロギーと正反対であり、円了の「哲学」思想と「教育」事業に幾多の誤解と苦難を齎した根源であったと言える。

さて、これまで円了については幾多の貴重な研究が発表されており、あるいは仏教学、あるいは儒学、あるいはいわゆる「哲学」思想としての西洋思想ないし哲学について、個別的には優れた研究も多い。しかし、相対的に見ると、極言すれば「群盲象を撫ずる」の比喩のごとく、それら一切の論述がびったりと噛み合わない印象が依然として残る。簡単に言えば、円了像が「哲学者」としても、「教育者」としても、一個の「人間」としても、明確に浮かび上ってこない。なぜであらうか。

一般的な原因としては、思想史の方法が過去約十年來一変したからである。高度情報化時代の現在、まず対象とされた思想家の活躍した時代と社会の綿密な究明なしには、思想家の真価は捉えられない。現代社会科学の術語を

用いれば、思想は思想家の生きていた歴史的・社会的文脈 (context) と相関的に把握されなければならない。

次に思想家が著作家でもある場合、その一切の著作・文献が可及的に蒐集されなければならない。一通の書簡が発見されたために、従来の空論が文字通り揚棄された例は、この過去十年間だけでも枚挙に遑がない。

第三に、上述の社会的・歴史的文脈との関係から、問題の思想家個人の、いわゆる「個人史」的側面が可及的に正確に捉えられなければならない。偉大な人間には「神話」、「伝説」が付きものである。もとより、その種の「神話」や、「伝説」が発生したこと自体に、すでに一種の貴重な意義が認められる。しかし、それは思想家その人自体の研究というより、もっぱら思想の解釈にまつわる問題であり、次元が異なる。

以上の一般的原理から円了の西洋思想にアプローチするに当り、そのいずれの面においても、難点が山積している。たとえば、明治史、さらにそれ以前の鎖国期に関する解釈はこの四、五年で一変した。なお驚嘆すべきことは、円了の理想——東西文化の融合による新しい哲学の成立——は目下怒濤の勢いで東アジアを中核として実現しつつある。しかし、円了が預言者的思想家であった、と言うだけでは、円了研究にはならない。要するに近代日本成立史が全面的に見直されつつあるのであり、それと関連付けつつ円了再検討が行われなければならない。

円了テキスト蒐集の問題も深刻であった。円了は体系的思想家ではなく、啓蒙と教育のために——多くは「要項」ないし「摘要」の形で——分りやすく記述したが、基本的原理以外に「体系」化をほとんど考慮していない。その上、大部分の主著には改訂、補正が多く、儒学的伝統もあって、いわゆる「ドキュメンテーション」(文献考証)はほとんど行われていない。

以上の結果として、円了の思想的変遷ないし発達や、諸著作間の関連が極めて把握しがたい。要するに円了思想の実証的研究は緒に就いたばかりであり、この事実の発見と確認それ自体がまた貴重な学問的経験であると言える。

従来文字通り汗牛充棟もただならない研究書と、詳細極まる「思想史」的伝記をもって知られているカントさえ、この十年間に評価が一変した。⁽¹⁾

以上の理由から円了に関する一次、二次、三次資料の蒐集については、その方面の担当者に委せて、限られた文献・資料と、乏しい関連文献の中で、円了の西洋思想に取組み始めた。それにさいし、従来余りにも等閑視されていた円了の西洋「二聖人」の受容と、その受容の在り方に問題を絞った。また、円了が西洋哲学を多少なりとも「体系的」的、つまり脈絡をもって論じている著作に問題を集中し、殊に円了西洋哲学受容の経路を具体的に究明するのに努めた。殊に円了が取上げている多数の近世哲学者、思想家たちの思想的関連付けに焦点を絞った。円了的著者においては、目下の文献・資料の在り方では、これ以外に方法がなかったとも言える。

この方法論は円了の言う広い意味の哲学に適用された場合、西洋古代・近世の哲学ばかりか、さらに広く「啓蒙哲学」と不可分であった、いわゆる「経済学」——本来の意味での *political economy* ——⁽²⁾をも包括せざるをえない。また、のちに明らかにするとく、円了の西洋哲学受容はスコットランド学派を介しており、そこから、リード、ハミルトン派の「自我意識」論にも強く影響されている。これが肯定的には仏教伝統の一種の心理主義、否定的には儒教的現世主義——怪・力・乱・神を語らず——等々と合併して妖怪論に結実したと思われる。そして、これらの諸次元は相互に関連しており、現在の支配的な哲学・社会科学研究方法である現象学にとって好個の対象である。⁽³⁾なお、付言すれば、円了は西洋哲学をイギリス新カント学派の柔軟なカント主義により摂取したればこそ、のちの大正期におけるカント研究者のごとく、イデオロギー的にカントを解しなかつた。⁽⁴⁾従来円了のカントについて誰一人正しく評価できなかった理由である。以上を——きわめて概括的ではあるが、——本「井上円了総合研究」第二部会、全七研究報告書の俯瞰的総論とする。

次いで、以下本第二部会研究総括責任者の立場から、円了の西洋哲学関係二四著作のうち、哲学に関する代表的一著作を統計的に分析して、円了における哲学の実体を解明したい。

〔一〕円了におけるソクラテスとカント

円了が西洋思想の代表として、いわゆる「四聖人」を選択し、東洋からは釈迦、孔子を、西洋からはソクラテス、カントを祭ったことは周知である。明治一八年における第一回哲学祭以降この四「聖人」は円了の司祭のもとに毎年祭られ続け、のち明治三七年「哲学堂」の完成をもって、——同年仏誕の日に「開堂式」挙行——円了の「哲学」に関する祭祀体制は完結する。したがって哲学に関する限り、哲学堂の完成をもって円了自身にとっては一応理想が完結されたとみてよい。これらの歴史的な問題については従来多くの円了哲学研究、また、端的には東洋大学五〇周年および八〇周年の年史に具体的かつ詳細に出来事そのものは詳述されているのでここでは繰返さない。

さて、ここで取上げたいのは、上述の期間、明治一八年より三七年に亘る約二〇年間に、すなわち「哲学祭」（明治一八年）に始まり、「哲学館」（明治二〇年）創設を経て「哲学堂」に結実した円了哲学の成熟ならび発展期において、円了にとってソクラテスとカントが何を意味したか、の問題である。殊にその発端が究明されなければならぬ。四聖人の選択がまずあって、哲学祭も哲学館も哲学堂も成立したのだからである。周知のごとく、哲学堂は円了の理念の具現化であった。「哲学堂」には四聖人像が掲げられ、その前に『大学』、『中庸』、『論語』、『易経』、『法華経』、『浄土三部経』、『ソクラテス伝記』、『純粹理性批判』が奉献され、「祭文」が奉ぜられた⁽¹⁾。

現代的常識をもってすれば、到底理解しえない東西古今の宗教的、思想的、哲学的諸派の一見奇怪極まるシンク

レティズム（折衷主義）の成立が従来究明されなかったことは不可解である。それ以上に不可解なのは、カントの代表作『純粋理性批判』がカント自身をも含む「四聖人」に「奉獻」されたことである。カントはいかにして「聖人」とされ、「純粋理性批判」はいかにして「聖典」ないし「經典」と化したのか。

この問題は四聖人の選択そのものにかかわる。例えば、カントが西洋近世哲学、ソクラテスが西洋古代哲学の代表的人物という選択法と比較したならば、釈迦と孔子はどうなるのか。二人とも「聖人」であるのはとりあえずよいとしても、二人とも文字通りの古典的「哲学者」であり、地域的にインドと中国（シナ）を代表しているにすぎない。そもそも東洋の近世思想ないし哲学は存在しなかったのか。要するに四聖人の選択には東西思想を対比したばあい、整合性が欠けている。これは円了に西洋の歴史感覚が理解できなかったことを反証している。そして、その反ないし非歴史的感覺こそ、円了をかえって——現代的に表現して——現象学的態度に安居せしめ、透徹した哲学觀を抱かせたのであろう。少なくとも円了の理解した西洋近世啓蒙思想には、十九世紀西洋の歴史主義が見られない。この点も円了の西洋哲学思想を正しく理解するための重要な鍵と思われる。

さて主題を西洋哲学に絞ろう。まずソクラテスが「聖人」として選ばれた理由は理解に難くない。徳川時代はもとより、ほんの戦前まで孔子は「聖人」であったし、「子曰く」は「子のたまわく」と読まれていた。儒教的教養によれば——漢学の諸派、朱子学、陽明学、古学等の諸派の区別なしに——孔子はキリスト教的な「霊体」としての「聖者」ではなく、「人間」として最高の徳と学を兼備した人物、「君子」中の「君子」であった。したがって、「聖人」——「聖者」ではなく——はみずからの修養により成る存在であり、決して「超人間」ではなく、また超越神からの「啓示」(revelation) による「預言者」(prophet) でもない。儒教の祭祀は「儀礼」であり、優れた人間への尊崇を形で表現することにより、みずからもその先例に倣うことを誓う儀式である。その意味では、形式も発

想も全く異なるが仏教における「覺者」(Buddha)の觀念に近いところもある。要するに、西欧キリスト教的見地に立てば、仏教も儒教も宗教ではない。彼らにとっては創造神、啓示神なくして宗教は存在しえない。明治以降導入されたキリスト教思想はその意味で多大の思想的、習俗的混乱を惹起した。「聖人」が「聖者」とされた。「仁」は世俗的、現世的、低俗的道德とされ、キリスト教的カリタス (caritas, charity) に及ばないとされた。ではあるが、フステル・ド・クルランジュの古典的名著を引用するまでもなく、ギリシア思想はむしろ東洋古典の世界観に近い。ソクラテスが「聖人」として祭られたゆえんである。円了の友人、同輩にとって、恐らく以上の観方は当時の常識として極めて容易に受容されたであろう。もとより、ソクラテスは「ダイモン」——現代流に表現すれば、「内なる使命観」ないし「良心の叫び」——に生涯導かれ、ついには死刑を甘受するに至る。しかし、それは殉教ではない。むしろ、セネカの死に通じる、一人の至高の人間の、しかもみずから甘受した「死」である。そこには何らの「超越神」も存在しない。

ではカントはどうか。円了におけるカントの問題こそ、円了西洋哲学の基本的主題であることは予想していたが、その追及は文献的、思想的に苦難の連続であった。

ドイツ後期ロマン派詩人、ハイネによればカントの『純粹理性批判』はドイツにおいて理神論——ハイネは「神」の認識の意味で用いている——を「処刑した剣」とされている。カントはその意味では西洋近世哲学より超越神を追放し、「哲学」の人間化の理論的完成者である。そして、カントの生涯はドイツ觀念論に受継がれ、フィヒテ、シェリング、ヘーゲルと継承されていく。

ごく最近まで常識とされてきた以上のドイツ哲学史におけるカントの位置付けは、もちろん、それ自体誤っているのではない。しかし、ハイネの言にもかかわらず、その後ドイツ哲学で「神」は形を変えて、「生き」⁽²⁾続けている

し、それ以上に、上述の系譜に従えば円了が若い時より研究に励んだミルやスペンサーとカントとの思想的関連が全く脈絡を失う。まして、円了中期の倫理学、後期の心理学は、いかに体系に捉われない啓蒙思想家円了の著述とは言え諸学の根源としての原理性を喪失しかねない。

ここで方法論を一変して、円了の哲学的著作の総点検を行うことにした。円了はもともと詳細な文献引用をせず、また引用資料を明示していない。また、仏教的伝統と儒教的著述法の一種の混合かと思われるが、今日の研究法とは全く異なり、多くは解説書——英文——に依存して自分なりの解釈や理論付けを行っている。そのさい、注意すべきは、まず取上げられている哲学者名である。次に、それらの哲学者の思想的脈絡付けである。なぜなら、円了の哲学者——中には多くの近世自然科学者を含む——解釈は極めて常識的であり、言わば教科書的引用であり、特に一定の哲学者に関して新説を述べたり、まして異を立ててはいない。しかし、その反面、時として、一面的引証があり、殊に後期には円了の活躍分野の拡大と多様化や海外旅行の成果として新思想の導入も活潑化し、哲学の意味が次第に多様化した傾向が見られる。

以上は円了の西洋近世哲学思想関係書を一応検討すれば誰でも受ける印象であるが、では、主な哲学関係書中に引用されている驚くべき多数の近世自然科学者、哲学者、思想家等々に関して、カントがなぜ彼らの全員を代表する「聖人」であるのか。東洋の二「聖人」釈迦と孔子、西洋の古代哲学の代表者ソクラテスに関しては、問題はない。ソクラテスこそ「哲学」(philosophy)の元祖であり、この用語と、この学問の創始者その人であった。円了は彼の哲学関係書の中では一言も言及していないが、フランスの「百科全書家」の活躍にもかなり通じていた様子である。円了として西周その他の日本流「百科全書」運動の同時代人であったから、彼らフランス「百科全書家」が「哲学者」と称し、自分たちをソクラテス一派——事実はプラント学派——に類比したことも円了たちにとって常

識であつたと思われる。ところが円了はカントを言わば近世の「ソクラテス」に類比しながら、また多くの近世のフランス思想家を引用していながら、ヴォルテールにもモンテスキューにも全く言及していない。では円了のカントとは何であつたのか。

〔Ⅱ〕円了におけるカント

問題を明確化するために、ここでは円了におけるカント受容の発端を究明しよう。円了の西洋近世哲学摂取の目的は初めから極めて実践的であり、端的に表現すれば、印度、中国、日本、すなわち仏教、儒教、神道ないし国学に加えて当時の大先進国である西欧諸国の近世思想を摂取し、累卵の危うきにある日本の伝統と道徳を再構築し、合わせて真の独立国家にまで立直したい、というにあつた。そして、西洋の哲学の理念こそ、円了のこの理想と決して背馳するものでない、と彼は早くから確信していたに相違ない。学生時代カントを研究し、スペンサーを学んだことは正にこの事実を裏付けている。明治の最高指導者たちはスペンサーを今日のごとく単なる進化論的、不可知論的哲学者とのみ見てはいない。彼の不可知論が窮極的には宗教と科学の調和を目指していること、——この宗教は必ずしもキリスト教とは言えないが——、その限りにおいてヴィクトリア王朝時代の輝ける世界帝国イギリスの一種の孔子と見做されていたことは明らかである。たとえば、スペンサーと明治政府の高官との往復書簡がこれを裏付けている。——スペンサーの『自叙伝』を見よ。——フランスのカントについても同じことが言えよう。コントの名著『実証哲学講義』であり、その三段階の歴史哲学はともあれ、同じく宗教と科学の調和が、ないし、さらに進んで「人間教」が後期には主張されている。そのみか、コントの歿後「コント協会」は一種の宗教的実

実践運動の母体となり、のちブラジル独立運動の精神的支柱となつた。⁽³⁾

これらの歴史的事実に鑑みれば、十九世紀中葉以降に、特にドイツで支配的であつた教壇哲学は哲学者と大学教授を混同した一時期の反哲学的現象にすぎず、哲学精神衰退の徴候そのものであつたかもしれない。とすれば、明治一〇年代後半の段階で円了が西洋哲学に初めて接し、殊にそのギリシアでの発端を学んで、ソクラテスを「聖人」として捉え、近世哲学をこの「聖人」の系譜によって理解しようとしたのも不思議ではない。円了の理解した「哲学」は徹底的に実践の学であつた。実践哲学とはもとと口舌の学ではなく実行の学であり、個人として、社会人として、世界人——円了の言う「宇宙」的規模の人間——として知と徳を磨くことに外ならなかつた。⁽⁴⁾

それにしても、なぜカントか？ この謎は円了がカントに接した過程を究明すれば明らかになる。

円了が世評と異なり相当の英語力を持つていたことは彼の講義メモ、ノート等により明らかであるが、カントを独乙文で読めたはずはない。また、円了の研究法としては必ずしも原典ないし忠実な英訳書を味読することが要請されてはいない。儒教においても、いわゆる訓詁の学が存していたが、それは西欧的な文献学や文献批判とは異質的であり、ともあれ円了は入手しうる限りの優れた哲学史や解説に依拠したと思われる。事実、円了の西洋人名引用には発音表記法の不完全さから誰を指すのか不明の例も若干あり、また今日は全く忘れられてしまつた当時の流行的哲学書なども混在している。しかし、円了は驚くべき洞察力と直観力により、一種の整合性をもってカント哲学を中心に西洋近世哲学史の系列と理論的脈絡を捉えている。⁽⁵⁾

この点を具体的に証明するために、円了の初期西洋哲学論の代表的著作により、そこに登場する近世哲学者を検討しよう。

1 『哲学要項』「前編」(明治一九年)

近世哲学者——自然科学者は省く——は次の頻度で引用されている。(姓名の表記は現代式に訂正)

- (1) 12回——カント(計一名)
- (2) 10回——ロック(計一名)
- (3) 8回——デカルト、ベイコン(二名)
- (4) 7回——リード、シェリング、ヘーゲル、フィヒテ、ライブニッツ(計五名)
- (5) 6回——スピノーザ、ヒューム(計二名)
- (6) 4回——スペンサー、クーザン、コント、ハミルトン、ミル(計五名)
- (7) 3回——ホッブズ(計一名)
- (8) 2回——ベンサム、ガッセンデイ、マールブランシュ、クラーク、パスカル、コンディヤック、ステュアール、ブラウン(計八名)
- (9) 1回——プライス、シャフツベリ、ウォルフ、バットラー、ハチソン、アダム・スミス、カッドワース、パークリ(計八名)

合計三三名、これを以下国別に応じ頻度順に分類して示す。

- (1) ドイツ人——カント、シェリング、ヘーゲル、フィヒテ、ライブニッツ、ウォルフ(計六名)
- (2) イギリス人——ロック、ベイコン、*リード、*ヒューム、*ハミルトン、ミル、スペンサー、ホッブズ、

ベンサム、クラーク、*ステュアート、*ブラウン、プライス、シャフツベリ、バットラー、**ハチソン、*アダム・スミス、カッドワース、**バークリ (計一九名) — *||スコットランド人、六名、**||アイ
ルランド人、二名)

(3) フランス人 — デカルト、コント、クーザン、ガッセンディ、マールブランシュ、パスカル、コンディヤック (計七名)

(4) オランダ人 — スピノーザ (計一名)

次に、近世哲学に関して、「総論」および「各論」の引用哲学者を表記しよう。「」内主として「自然科学者」

(1) 「総論」 — ベイコン、デカルト、「コペルニクス」、「ガリレオ」、「ニュートン」、「フランクリン」、「キュー
ヴェエ」、「ダーヴィン」、パスカル、スピノーザ、ガッセンディ、マールブランシュ、ライプニッツ、ホッ
ズ、シャフツベリ、ロック、クラーク、バークリ、ウォルフ、ヒューム、コンディヤック、リード、バット
ラー、ハチソン、アダム・スミス、カント、フィヒテ、ベンサム、ステュアート、シェリング、ヘーゲル、
クーザン、コント、ハミルトン、ミル、スペンサー、ブラウン、カッドワース、プライス (計三三名、他に
自然科学者六名)

(2) 「各論」 — 対象者、「」 関連引用者

(a) — 「ベイコン」 — 「ガッセンディ、ホッズ、ロック」

(b) — 「デカルト」 — 「ベイコン、パスカル、マールブランシュ」

(c) — 「スピノーザ」 — 「デカルト、ライプニッツ」

- (d) — 「ロック」 — 「ベイコン、ホップズ、コンディヤック、ライプニッツ、カント、リード」
- (e) — 「ライプニッツ」 — 「ロック、デカルト、スピノーザ」
- (f) — 「バークリ」 — 「ライプニッツ、カント、フィヒテ」
- (g) — 「ヒューム」 — 「ロック、リード、カント」
- (h) — 「リード」 — 「ヒューム、デカルト、ベイコン、カント、ステュアート、ブラウン、ハミルトン」
- (i) — 「カント」 — 「ロック、ライプニッツ、デカルト、ベイコン、ハミルトン」
- (j) — 「フィヒテ」 — 「カント、ヘーゲル」
- (k) — 「シェリング」 — 「ヘーゲル」
- (l) — 「ヘーゲル」 — 「なし」
- (m) — 「クーザン」 — 「ヘーゲル、ハミルトン、カント、ロック、ヒューム、シェリング」
- (n) — 「コント」 — 「ミル、ヒューム」
- (o) — 「ミル」 — 「ヒューム、コント」
- (p) — 「スペンサー」 — 「カント、コント、ミル」

以上の数学は何を教えるか。まず、円了がカントを最大限に重視したことが確認される。ベイコン、ロックの系（イギリス経験論）とデカルト（フランス合理論）の一種の揚棄者としてのカントという、カント自身の告白——『純粹理性批判』「序文」その他——による見地を円了は当然のこととは言え正確に、近世哲学的に把握している。この解釈は実は十九世紀にドイツ哲学史において、主としてヒュームの再認識——『人間本性論』の再発見——

—以降の定説であるから、円了のドイツ観念論成立に關してのイギリス經驗論の役割への洞察は、まこと鋭いと言われなければならない。

しかし、これ以上に重大な事實はリードを代表——頻度実に七回——とする一連のイギリスならびにスコットランド学派の重視である。この思想系列と、それらとフランスならびにドイツ哲学との歴史的關連性については、過去四、五年來初めて現代西歐哲学界で再検討が開始されたのであり、事實これらの原典の大部分はもとより、關係文献さえほとんど日本においては入手不可能である。⁽⁶⁾

リードに代表されるカント哲学の繼承は實はカント自身により「常識哲学」として酷評され、かつヒューム哲学——當時無神論的と受取られていた——への反撥という、二重の意味での反定立から生まれた。国籍別に見たとき上述の数字を分りやすく表示すれば、

ドイツ人	— 6	イギリス人	— 19
フランス人	— 7	スコットランド人	— 11
オランダ人	— 1	アイルランド人	— 2

の配分となる。そこで、ソシオメトリー（社会統計学）の濫用めくが、一応の指標として頻度を係数として計算すれば。

ドイツ人	41
(7)	
イギリス人	61
フランス人	24
オランダ人	6

イングランド人	37
スコットランド人	22
アイルランド人	2

という数字となる。数字上だけによれば、ドイツとイギリスが中心とされ、イギリスの中ではスコットランド学派が極めて重要な役割を果たしていることが知られる。

スコットランド学派のうち正確(?)を期してハチソンをアイルランドに入れたが、一般的慣習に従い、スコットランド人として扱えば、スコットランドとフランスはほぼ同価——23——となる。フランスの場合、デカルトは別として、最近ようやく再評価され始めたマルブランシュ、コンディヤック、パスカル——デカルトとの対比として——がすでに取入れられている意味は重要である。要約すれば、以上の数が示唆していることは、円了による限り、カント哲学の理解のためには、ドイツ、イングランド、スコットランドの代表的哲学者たちを、少なくともほぼ同等に、かつ相関的に対比、検討すべきである、との恐らく暗黙の主張が行われているのである。殊に、明治二〇年代以前の段階でアダム・スミスまで哲学者として捉えていることは卓見とされてよい。また最近ようやく一般化し始めたステュアート(デュゴールド)の再評価——彼こそ近世経済学の実質的な創始者である——にも連なる見地である。

もとより円了がこれらの何十名に上る近世哲学者をいわゆる研究の結果として正しく評価したと言うのではない。彼の利用した二次資料は明らかでないが、——恐らくステュアート、リード、ハミルトン、マッキントッシュ等を

介してであろう——、カントの思想的系譜と影響について、当時これだけの系統的把握ができたことは驚異的と言
うほかはない。⁽⁸⁾

最後に「総論」、「各論」の問題については、まず「総論」において、三三名の哲学者に対し、六名の自然科学者
が取上げられている意味が注意されなければならない。「哲学者」対「自然科学者」と現代的常識に則して区別した
が事実上それは非歴史的区分であり、周知のごとく、デカルトは現代数学および自然科学の創設者、ライブランチ
ツも微積分学の発見者、ガッセンディもむしろ自然科学者等々……正確には引用思想家のうち四分の一は自然科学者
である。これは、円了の実証主義精神の反証であり、極言すれば彼の現世主義、実用主義的思想の標識であろう。

同時にこれは彼の正しい意味での「科学主義」、すなわち「科学」というイデオロギーではなく、「穏健な懐疑論」
により批判されることを前提にした真の科学主義の表われである。そして、この見地こそ、「先天性」や「先験性」
という難問は別として、カントの「懐疑的方法」の——少なくとも「方法論」としては——真髓であり、かくして
スペンサーの「不可知論」にカントが繋がる。

次に「各論」対象者一六名とその各人との関連で引用された哲学者について検討すれば、次の諸点が注意される
べきであろう。まず、ベイコンにカッセンディ、ホップズを結んだことは——誰の説に依ったか不明にせよ——正
しい洞察である。ロックにコンディヤック、リードを関連付けた点も解釈として正しい。前者はフランス経験論哲
学者、後者はスコットランド学派の代表である。パークリは不可解。ヒュームは的確。リードに関してはスコット
ランド学派の伝統を正確に継承して解釈されている。カントに関連してハミルトンを引用していることは、円了の
カントがカントその人でなく、イギリス新カント学派のカントであることを裏付けている。現にリード、カントの
両項目に引用された多彩な哲学者はイギリス新カント学派の系譜を鮮明に表示している。そこにはリード↓ハミル

トンの系列が明快に読取れる。フィヒテ、シェリング、ヘーゲルに関しては、強いて表現すれば、スコットランド学派の「自我意識」が極大に普遍化された「精神」論——絶対精神——と円了は解しており、さらに注意に値するのは、これら三人の思想に共通して前提ないし論証(?)されている世界史の段階説に対して円了はほとんど理解を見せていない。この逆転的終末論が円了には理解できなかったのではあるまいか。さればこそクーザンの折衷主義に共感でき、かたわら、ミル、コント、そしてスペンサーに到達できたと解釈できる。

次に本『哲学要項』『統編』を検討しよう。

2 『哲学要項』『統編』

本「統編」は前編に引用された膨大な近世哲学の学説を円了独自の分類により解説したものである。まず頻度から示そう。

- (1) 10回——スペンサー(計一名)
- (2) 7回——カント(計一名)
- (3) 3回——ミル、リボー(計二名)
- (4) 2回——プレー、ベイン、ゴールトン、ロッツエ、ライプニッツ、ヘーゲル、(計六名)
- (5) 1回——リュース、ステューアート、モルフエー、コイラ、ラマルク、ダーウイン、ヘルシエル、ニュートン、フランクリン、デカルト、マッキントッシュ、カーペンター、キルクマン、ファイブラー、シェリング、リード、ハミルトン、ゲーテ、アレハナリ(計一九名)

以上総計二九名。次に個別対象的には次のごとし。

- (a) 「身心関係」——プレー、ステュアート、ベイン、スペンサー、リポー、モルフェー（計六名）
- (b) 「進化原理」——ゲーテ、ラマルク、ダーウイン、カント、ヘルシエル、スペンサー、リポー、ゴールトン（計八名）
- (c) 「非物非心論」——スペンサー（計一名）
- (d) 「感覚論」——ニュートン（計一名）
- (e) 「思想性質」——ロック、ライブニッツ、（計二名）
- (f) 「本能起源」——ロック、カント、ライブニッツ、スペンサー、ゴールトン、リポー（計六名）
- (g) 「無物受心論」——ミル、マッキントッシュ、カント、スペンサー、カーペンター、ベイン、（計六名）
- (h) 「意識論」——デカルト、キルクマン、カント、スペンサー、ミル（計五名）
- (i) 「自覚論」——スペンサー、カント、フィヒテ（計三名）
- (j) 「有物有心論」——シェリング（計一名）
- (k) 「物心同体論」——ヘーゲル（計一名）
- (l) 「物心二元論」——リード、ハミルトン、カント、スペンサー、アレハナリ（計五名）

まず、頻度ではスペンサー、カントが筆頭の一位、二位を占めている。この統編では円了独自の哲学原理の列举が目的とされている。換言すれば、体系的整合性ではなく、観方（態度——対象への「立ち向かい方」）の相違に基づいて、近世哲学者の諸立論が区分されている。これは現代の多次的、現象学的哲学方法論にそのままである。ただ、特殊な造語と、造語の概念規定の不確かさから混乱が見られるし、また、引用思想家の中には姓名の表記法

の不正確さのためにか、当時知名であつてその後哲学史より消滅したためにか、そのいずれか、双方か不明のまま確認できない人物が若干見当る。しかし、逆に言えば、それは円了がいかに当時として最新な西欧哲学情報の摂取に努めていたかの反証とも解しうる。

まず、全般の特徴として、円了の哲学対象論がほぼカントからスペンサーの全時期、国別ではドイツ、イギリス（スコットランド）、フランスを包括していることが明白である。次に対象へのアプローチが著しく科学的、実証的であることも注意に値する。事実哲学者というより、科学者と呼ばれるべき人物が多く取上げられている。「進化論」——「進化論」——にラマルク、ダーウィン、リボー、ゴルトンと並んでゲーテ、カントが見られるのは一種の卓見と言えよう。ゴルトンやリボーは円了の「心理学」への傾倒を暗示している。「感覺論」、「本能起源」の二項目は円了における自然哲学を示唆していると解されるべきか。「意識論」以下「物心二元論」に至る、かなり混乱した取扱いは、スコットランド学派の「自我意識」論とリボー流の実証主義的心理學と、カント的、より正しくはカントの「方法的懷疑主義」的「意識論」——さればこそ、デカルト、カント、スペンサー、ミルが「意識論」に一括されている——の混然たる並記であり、この主題はのち「妖怪論」に結実(?)する。

結 語

以上の検討で明らかなく、円了におけるカントは、カントその人ではなく、十九世紀末葉におけるイギリス新カント学派を介して捉えられたカントである。このカント学派の特徴は一、カントの実践哲学の重視、二、自我意識の探究、三、経験主義ないし実証主義の重視と超越論や先験哲学の拒否であり、その結果としてドイツ新カント

学派西南ドイツ派のごとく、自然科学対文化（精神）科学の二元論に陥る傾向も内在し、それを克服するためもある。——リード、ハミルトン。——かつ、この視点こそカントの真意であり、『純粹理性批判』はそれ自体価値を持つのではなく、第二、第三批判の基盤としてのみ評価されるべきである、と早くよりプリングルーパチスンなどが主張している。この動向が「意識」の問題に対決したとき初めて「心理学」が成立ないし出現したのであり、かくして「哲学原理」——純粹哲学——、「倫理学」、「心理学」は三者一体、いわばイギリス新カント学派の「三位一体」であった。また、歴史哲学に関しては、この派は著しく実証的、社会的であり、フランス学派の段階説、ドイツ流絶対精神論等に組しない。ダーヴィニズムがイギリスで成立し、社会思想は愚か哲学原理にまで浸透したゆえんである。

円了哲学が以上の学派の主流を極めて忠実に検証していることは上述のごとき『哲学要項』の統計学的研究で明らかになされたが、同じ方法により、他の二代表哲学著作『倫理摘要』（改訂版、明治二六年）および『心理摘要』（初版、明治二〇年、四版、同三二年）を検討して、ほぼ同じ結論が得られた。両著は内容が対象的に限定されており、原理の開陳というより実践に主眼が置かれた手引書的傾向が強いので、あえて割愛した。

（終り）

註 緒論

（一） 以上は現在の哲学や社会科学の思想研究者にとって常識にすぎない。紙面の都合上、文献は省略。拙訳『D・スチュワートIIアダム・スミスの生涯と著作』（昭和六〇年・お茶の水書房）、その他過去約十年間の「東洋大学・大学院紀要」、「同社会学部紀要」等に発表した拙論約二〇編を参照されたい。これらは、理論的に円了研究の基盤をなす論文である。

- (2) 円了が理解した十八世紀の意味での「経済学」——いみじくも「経世済民」の学と訳されている——には「国家の」(political)「家政学」(economy)の含蓄あり。この含蓄はケネー学派、ジャン・ジャック・ルソーはもとよりマルクスにさえ存在している。坂本市郎、新田俊三両研究員の該博・明晰な報告書参照。
- (3) カントに関しては馬場喜敬研究員、スコットランド啓蒙哲学については齋藤繁雄研究員、現象学的円了研究に関しては、新田義弘研究員の協力を得ることができた。三研究員とも、それぞれの分野において現在最高権威である。
- (4) この円了のカント解釈に関連して、円了の英文未公開文献の哲学史的・知識社会学的調査・解明の果たした役割は甚大である。齋藤繁雄、喜多川豊宇両研究員の尽力に感謝したい。
- (5) 本論文は、上述のごとき資料状態から、内在批判の方法を取らざるをえなかった。その場合、統計的手法はほとんど唯一の外在(?)ないし具体的検証である。

註 本論

(1) 四書、五經のうち、前者では『孟子』の脱落、後者では『易經』のみの採用、仏典では『浄土三部經』は円了にとって当然として、『法華經』の採用は注目に値する。また『ソクラテス伝』はよいとして、カント『純粹理性批判』の經典化も示唆するところが多い。ここで詳しく論じる紙面はないし、また本論文の埒外でもあり、筆者の能力外のテーマであるが、次の諸点のみを指摘しておきたい。

漢籍に関してまず『孟子』の脱落は円了の人間観の基本にかかわる。彼は荀子的性悪性——事實は社会環境の人間性形成主義、今日社会学で言う「エスノメトロロジー」的見地に立つ。その限りにおいて円了は悲観論者であった。そして、これが円了を教育——極めて幅広い意味での——に生涯献身させる原動力となった。

『易經』のみの採用は円了の歴史観を示唆している。五經中極めて重要な『春秋』を重んじなかったことは、円了にダーウィンやスペンサーの「進化論」の受容を容易にしたと推測される。かつ進化論の基本原理「突然変異」は「偶然」の科学原理化であり——現代における「進化論」批判を参照——、その限りにおいて『易經』に直結すると言えよう。

仏教に関しては、『法華経』の採用は二つの意味を持つと思われる。浄土宗、浄土真宗と同様に日蓮宗もともと庶民に根差す宗派であり、その限りに於いて、下からの啓蒙を目的とする。かつ、動乱期、危機より生まれ宗教であり、国家的単位で考察すれば、「国難」、仏法的に見れば「宗教」的危難時に生じた宗派である。日清戦争以前の日本が経済的、政治的、なかならず文化的に、一方では清国の、他方では西欧諸国の属領的存在でしかなかったことが忘れられてはなるまい。明治二〇年ごろより活潑化する「日本」再認識、再建運動の一環として、円了の「四聖人」祭祀も開始されたのであり、そう見れば、「哲学堂」は東西哲学融合の一聖堂、新しき湯島の「聖堂」である。

西洋哲学については以下で詳論する。

(2) 代表的著作としてはカッシーラーの大著『認識批判』あり。この問題すでに他に詳論したので繰返さない。

(3) ブラジルの国旗に、中央の地球儀の下にポルトガル語で記されている「秩序と進歩」は後期コントの「愛を原理に、秩序を基礎に、進歩を目的に」という標語より採用された。「愛」が脱落したのはなぜであろうか。

(4) 円了が哲学堂に奉献した聖典の筆頭、四書の「初学徳に入るの門」である『大学』の教えは「修身齊家治國平天下」である。

(5) 円了が「ソクラテス」(古代)から「カント」(近世)に飛躍し、中世およびキリスト教を全く——少なくとも哲学史的には——無視した事実は注意されなければならない。その最大の理由の一つは、儒教的思惟様式——いわゆる *mentality*、「心性」——にはキリスト教的啓示神が「タワゴト」としか思えなかったのである。この点については、新井白石の『西洋紀聞』中のシドチとの問答などが入手しやすい文献であろう。徳川幕府期のイエズイタ僧の諸文献、さらに大規模には十八世紀の世界的大國清國についての西洋宣教師の記録などは、最近西欧の学者が改めて注目しつつある。

次の理由は、以下で詳述するごとく円了がもっぱら活用した英文哲学史、文献が新教的傾向が中心であり、中世否定的傾向が一般的であったことである。一般に「十八世紀啓蒙思想」と呼ばれている「百科全書家」の思想も、その意味で「中世」を無視ないし否定して、「ソクラテス」に回帰したのであるが、ヴォルテール、ダランベール、

デイドローたちは活躍の地盤が旧教国だっただけに、中世への対応も異なる。円了の啓蒙主義が、一、本質的に「革命的」たらざるをえなかった「百科全書家」的实践主義ではなく、「穏健」な、いわば「社会改良主義」的啓蒙主義であり、二、伝統と習俗を重んじ、人間の「社会性」(sociality)——「社会形式性」(socialibility)ではない——を前提とする世界観であったこと、三、その限りに於いて「实践的」であり、「実践」を通じて「理論」ないし「原理」を「検証」して行く態度を取っていたこと、以上三点は銘記されなければならない。

以上の「哲学原理」は「穏健な懐疑論」——宗教的には「穏健派」——であり、それこそ現代科学全般の基本原理解である。ペイコンの「自然史」[誌]による「第一哲学」検証論、デカルトの「方法的懐疑」、ロックの「蓋然的知識」、ヒュームの「懐疑論」、カントの「懐疑的方法」からスペンサーの「不可知論」に至るまで、徹底的に反イデオロギー的、したがって、理論的にも、実践的にも、宗教的にも——「宗教」の意味が何であれ——熱狂や狂信を嫌悪する。

なお、円了の場合、キリスト教への警戒心も大いにあったと思われるが、それに対抗して実践行動を開始したり、文書で討議せずに、むしろ包括してしまふべきだと考え、また、その可能性を晩年には確信し、安んじてキリスト教「聖書」にも言及し始めた感がある。

以上に略記した「穏健な啓蒙主義」——「スコットランド哲学啓蒙主義」——の裏付けの史観は「自然史的歴史」であり、ごく最近西欧で再検討され始めた。これには現在の日本の世界的役割——地理的位置と国際貿易、産業的役割等を含め、——が十八世紀末——一七七〇年代以降——のイギリス、より正しくはスコットランドに全く類比的である、という西欧学者の認識も大いに影響している。これについては、筆者は多数の著書、訳書、論文で言及しているので詳述はしない。

期せずして円了は、百年後の祖国を予言していた。しかし、円了がこの学派の系譜から近世哲学を学んだ契機は全くの偶然であったと思われる。ただし、スペンサー、コント、ヘーゲル等の思想からカントの「歴史的」意義に——恐らく一種の直観により——到達したのは、やはり天才的天稟によるのであろう。

以上の思想史的背景を本文全般の註解として付加しておく。

(6)——ミューアヘッドの問題著作担当の斎藤研究員は数回に亘るスコットランドにおける学会、大学教授たちとの公的、私的學術公流等を利用して、かなり多数の貴重な文献およびテキストの入手に成功した。筆者自身もほほ七、八回に亘る公的、私的な西欧の學術団体の訪問を利用して相当量の貴重なテキストや文献を入手できた。この意味では、われわれのスコットランド学派研究は、この分野に関する限り世界の水準の最先端に位置していると断言してよいかと思う。そして、円了のカント研究が——遺憾ながら、彼の近世哲学研究の仔細が内的批判に依る以外全く理解しえないにせよ——極めて犀利かつ的確であったことを、われわれは「学祖」云々という狹隘な見地からではなく、偉大な日本人先覚者として誇りとすべきであろう。誰が明治のあの時代に「聖人」カントの「生まれ、研究し、死んだ」「聖地」にまで「巡礼」したであろうか。この堅実で穩健、かつ実践的にして実証的な精神こそ本當の意味の「哲学」に外ならない。

(7)——ハチソンは生まれはアイルランドであるが家系的にはスコットランド人であり、一般にはスコットランド人として扱われている。

(8)——この問題については拙稿ヒューム論参照。

(9)——イギリス新カント学派の研究は西欧でも目下開始されたばかりである。自負して主張するつもりはないが、われわれの研究はその嚆矢であり、この蓄積があったればこそ円了の西洋思想研究に着手できたのであり、その逆ではない。